

## 研究報告

プリセプター看護師における  
役割受容の臨床経験年数別の比較Nurses' Relation between Years of Clinical Experience and Accepts of the Role of  
Preceptor佐藤 佳子 米澤 弘恵 石綿 啓子 鈴木 明美 遠藤 恭子  
Yoshiko Satoh Hiroe Yonezawa Keiko Ishiwata Akemi Suzuki Kyoko Endo獨協医科大学看護学部  
Dokkyo Medical University, School of Nursing

**要 旨** 本研究の目的は、プリセプター看護師の役割受容を臨床経験年数別に比較することによって役割受容の違いを明らかにすることである。

対象者は、プリセプターシップを導入している450床以上の病院7施設に勤務し、プリセプターの役割を担っている看護師320人である。調査には、三川が作成した役割受容尺度を用いて自記式質問紙調査を行った。分析には統計解析ソフトPASW Ver.18.for Win.を用いて、記述統計、一元配置分散分析、多重比較を行った。

その結果、229人（有効回答率：84.5%）を分析した。対象者を看護師の臨床経験年数に2～3年目をA群（n=100）、4～5年目をB群（n=78）、6年目以上をC群（n=51）の3群に分類した。3群別でみると、A群の平均年齢は24.2±1.7歳、所属病棟での経験年数は平均2.9±0.3年であった。B群の平均年齢は25.7±2.7歳、所属病棟での経験年数は平均3.8±1.0年であった。C群の平均年齢は31.2±4.3歳、所属病棟での経験年数は平均3.5±1.8年であった。役割受容は4つの下位尺度から構成されている。＜役割満足（8項目）＞の平均得点では、全対象者は24.1±4.3点、A群は23.8±4.5点、B群は23.7点±4.1点、C群は25.0±3.8点であった。＜役割評価（7項目）＞の平均得点では、全対象者は22.7±3.9点、A群は22.4±3.6点、B群は22.4±3.6点、C群は23.3±3.7点であった。＜役割有能感（5項目）＞の平均得点では、全対象者は12.2±3.1点、A群は11.6±3.3点、B群は12.3±2.8点、C群は13.0±3.0点であった。＜役割達成（7項目）＞の平均得点では、全対象者は22.3±2.9点、A群は22.3±2.9点、B群は21.8±2.7点、C群は22.9±3.0点であった。役割受容の3群比較では、＜役割有能感＞で3群間に有意差（P<0.05）がみられ、臨床経験年数2～3年目のA群と6年目以上のC群の間で有意（P<0.05 F=3.60）にA群が低かった。＜役割満足＞＜役割評価＞＜役割達成＞では、臨床経験年数4～5年目のB群が最も低い傾向を示した。

プリセプター看護師の＜役割有能感＞は、臨床経験年数で異なることが明らかになったことから、プリセプター看護師の臨床経験年数を踏まえたプリセプターシップの検討が必要であることが示唆された。

キーワード：プリセプター， 役割受容， 臨床経験年数， 看護師，

## I. はじめに

近年、新卒看護師の早期離職が大きな問題となっており、その教育・支援体制として3,286施設のうち1,763施設の病院看護部でプリセプターシップを導入している<sup>1)</sup>。プリセプターシップの目的は、新卒看護師のリアリティショックを緩和させ、職場に適應できるように支援する<sup>2)</sup> ことといわれているが、看護師のキャリアアップの機会の一つとしても重視されている。

プリセプターの役割を経験することは、自己の看護技術力や指導力の不足に気づき<sup>3)</sup>、教えるだけでなく新たな学びの機会<sup>4)</sup> として有用であるといわれている。しかし、実践モデル、支援者をはじめ、教師、指導者<sup>5)</sup>、研究者<sup>6)</sup>、社会人としてのモデル<sup>7)</sup> など、複数の役割が求められることから、プリセプターという新しい役割を得ることには戸惑い<sup>8)</sup> や負担感が大きいという課題も報告されている。オルポート<sup>9)</sup> が、複数の役割によってしばしば葛藤を引き起すと述べることから、新卒看護師に一年間マンツーマンでかわるプリセプター看護師には大きな負担を強いているのではないかと考える。

また、プリセプターになる看護師は20代が多い。エリクソンによれば20代は、これまで作りあげてきた自己を失うことなく、他人とのかわり方を学ぶ時期であると述べている。岡本<sup>10)</sup> は、自己同一性について、個としてのアイデンティティを考えるうえで、職業にかかわるアイデンティティは、職業を通して自分らしさをいかに生かし育むかという社会に対する自己の定義として欠くことのできない重要な要素であると述べている。濃密な人間関係は多大なストレスを伴い、このストレスがバーンアウトを引き起こすことになる<sup>11)</sup> といわれることから、プリセプターとしての自分の働きが新卒看護師の役に立ち、その成果が得られれば役割を受容しやすく、ストレスや負担の軽減につながるのではないかと考える。

さらに、プリセプターを担う看護師は、新卒看護師の気持ちに共感しやすいとされる臨床経験年数2～3年目の看護師が望ましい<sup>12)</sup> とい

われ、3年目の看護師と関連させて論じられてきた<sup>13-17)</sup> 傾向がある。しかし、ベナー<sup>18)</sup> は、2～3年目の看護師は現在および予測される状況の中で、どの属性や局面が重要で、どこが無視できるのかの本質的な見分けはできるが、看護場面での統率力や偶発事故への対処、管理能力では中堅の看護師に比べスピード性や柔軟性に欠けると述べている。一方、3～5年目の看護師は、自分自身で状況判断を行い、迅速で適切な行動をとることができるようになり、患者のわずかな変化も見逃さないと述べている。このことから、新たな役割を得ることへのストレスや負担感、臨床経験年数による技能習得レベルによって異なるのではないかと考える。

このようなことから、プリセプターの役割の受け止め方には、臨床経験年数によって違いがあるのではないかと考える。しかし、プリセプターに関する研究では、プリセプターの役割受容を臨床経験年数別に明らかにしているものは見当たらない。

そこで本研究では、プリセプター看護師の役割受容を臨床経験年数別に比較することによって役割受容の違いを検討した。

## II. 用語の定義

プリセプターシップ：新卒看護師一人に対し継続的に指導を行う一人の指導者を配置して指導する制度<sup>1)</sup> である。

役割受容：自分の生き方や果たすべき役割といったより外面的な側面の認識や肯定的評価に焦点を当てた概念である。<sup>19)</sup>

## III. 研究方法

### 1. 対象者

A県内でプリセプターシップを導入している450床以上の病院7施設に勤務し、プリセプターの役割を担っている看護師320人を対象とした。

### 2. 調査内容

#### 1) 背景

性別、年齢、看護師の臨床経験年数、配属病棟での勤務年数などの項目とした。

## 2) プリセプターの役割受容

プリセプターの役割受容は、三川<sup>19)</sup>が作成した役割受容尺度を用いた。この尺度は、自分が果たすべき役割をどの程度重視し、受容しているかに焦点を当てた尺度である。役割受容尺度は、「役割満足」8項目、「役割評価」7項目、「役割有能感」5項目、「役割達成」7項目の4因子と「予備尺度」3項目の合計30項目から構成されている。各因子については、「役割満足」は自分の生き方や役割に対する生きがいや満足を示している。「役割評価」は自分の生き方や役割の肯定的評価を示している。「役割有能感」は自分の果たすべき役割を遂行する能力への自信を示している。「役割達成」はさまざまな役割を積極的にこなす意欲や自信を示している。信頼性と妥当性は確保されたものである。回答は、「まったく当てはまらない」から「非常によく当てはまる」までの5段階評定で、順に1～5点を与え得点化し、下位ごとの合計点を分析に用いた。

## 3. 調査方法

自記式調査票を用いて調査した。調査票は、対象施設の看護部に研究の趣旨を説明した後、プリセプターの数分の配布を依頼した。対象者には研究の目的・内容、プライバシーの遵守、目的以外に使用しないことを書面で説明し、研究への協力をお願いした。配布は、看護部を通じて調査票と返却用封筒を依頼し、各人が封をして返却用封筒に入れたものを留め置きし、研究者が回収した。また、研究への協力は、回答をもって同意を得た。

調査期間は、平成21年6月25日～8月31日とした。

## 4. 分析

調査票の回収数は、271人（回収率：84.7%）であった。そのうち229人（有効回答率：84.5%）を分析対象とした。

分析は、看護師の臨床経験年数で分類し、2～3年目をA群（以下A群）、4～5年目をB

群（以下B群）、6年目以上をC群（以下C群）とし3群間比較を行った。また、統計解析にはPASW Ver.18.for Windowsを用いて、記述統計、一元配置分散分析、多重比較を行った。

## 5. 倫理的配慮

本研究は、獨協医科大学生命倫理委員会において審査を受けて行った。調査は、文書にて、研究の趣旨、目的、方法、研究への参加は自由意志によるものであること、調査の同意や回答が勤務評定に影響することはないこと、回答は統計的に処理するため個人が特定されないことなどを明記し、プライバシーの遵守に努めた。また、質問紙の回収をもって、研究への協力の受諾とした。

## IV. 結果

### 1. 対象者の背景

対象者の背景については、表1に示した。対象者全体では、性別は男性13人（5.7%）、女性216人（94.3%）で9割以上が女性だった。年齢では21～43歳に分布し、最も多かったのは25～29歳96人（41.7%）、次いで21～24歳94人（40.9%）、30～34歳28人（12.2%）、35～39歳9人（3.9%）、40～44歳3人（1.3%）で、平均年齢は26.3±3.9歳であった。所属病棟での経験年数では1～7年目に分布し、最も多かったのは3年目109人（47.6%）、次いで4年目58人（25.3%）で、平均3.3±1.1年であった。プリセプターの経験回数では1～6回に分布し、最も多かったのは1回目156人（68.1%）で6割以上を占めていた。次いで2回目53人（23.1%）、3回目15人（6.6%）、4回目4人（1.7%）、6回目1人（0.4%）で、平均1.4±0.7回であった。看護基礎教育課程では、最も多かったのは専門学校（3年課程）108人（47.2%）、次いで大学51人（22.3%）であった。最終学歴では最も多かったのは高等学校卒業102人（44.5%）、次いで大学卒業54人（23.6%）であった。勤務している病棟では最も多かったのは外科系94人（41.0%）、次いで内科系70人（30.6%）であった。病棟の診療科数では最も多かったのは単科病棟116人

表1. 対象者の背景 人 (%)

項目	全対象者 n=229(100.0)	A群 n=100(43.7)	B群 n=78(34.1)	C群 n=51(22.2)
<b>性別</b>				
男性	13( 5.7)	7( 7.0)	3( 3.8)	3( 5.9)
女性	216(94.3)	93(93.0)	75(96.2)	48(94.1)
<b>年齢</b>				
21～24歳	94(40.9)	74(74.0)	20(25.6)	—
25～29歳	96(41.7)	23(23.0)	53(67.9)	20(39.2)
30～34歳	28(12.2)	3( 3.0)	4( 5.1)	20(39.2)
35～39歳	9( 3.9)	—	—	9(17.6)
40～44歳	3( 1.3)	—	1( 1.3)	2( 3.9)
平均±SD(歳)	26.3±3.9	24.2±1.7	25.7±2.7	31.2±4.3
<b>所属病棟での経験年数</b>				
1年目	10( 4.4)	—	4( 5.1)	6(11.8)
2年目	26(11.4)	7( 7.0)	6( 7.7)	13(25.5)
3年目	109(47.6)	93(93.0)	6( 7.7)	10(19.6)
4年目	58(25.3)	—	50(64.1)	8(15.7)
5年目	17( 7.4)	—	12(15.4)	5( 9.8)
6年目	6( 2.6)	—	—	6(11.8)
7年目	3( 1.3)	—	—	3( 5.9)
平均±SD(年)	3.3±1.1	2.9±0.3	3.8±1.0	3.5±1.8
<b>プリセプターの経験回数</b>				
1回目	156(68.1)	99(99.0)	45(57.7)	12(23.5)
2回目	53(23.1)	1( 1.0)	30(38.5)	22(43.1)
3回目	15( 6.6)	—	3( 3.8)	12(23.5)
4回目	4( 1.7)	—	—	4( 7.8)
6回目	1( 0.4)	—	—	1( 2.0)
平均±SD(回)	1.4±0.7	1.0±0.1	1.5±0.6	2.2±0.9
<b>看護基礎教育課程</b>				
専門学校(3年課程)	108(47.2)	50(50.0)	35(44.9)	23(45.1)
専門学校(2年課程)	40(17.5)	7( 7.0)	11(14.1)	22(43.1)
短期大学(3年課程)	23(10.0)	4( 4.0)	17(21.8)	2( 3.9)
短期大学(2年課程)	5( 2.2)	2( 2.0)	2( 2.6)	1( 2.0)
大学	51(22.3)	36(36.0)	12(15.4)	3( 5.9)
その他	2( 0.9)	1( 1.0)	1( 1.3)	—
<b>最終学歴</b>				
高等学校卒業	102(44.5)	39(39.0)	31(39.7)	32(62.7)
短期大学卒業	32(14.0)	8( 8.0)	21(26.9)	3( 5.9)
大学卒業	54(23.6)	38(38.0)	13(16.7)	3( 5.9)
大学院(修士課程)修了	2( 0.9)	—	1( 1.3)	1( 2.0)
大学院(博士課程)修了	1( 0.4)	1( 1.0)	—	—
その他	38(16.6)	14(14.0)	12(15.4)	12(23.5)
<b>勤務している病棟</b>				
内科系	70(30.6)	26(26.0)	30(38.5)	14(27.5)
外科系	94(41.0)	43(43.0)	25(32.1)	26(51.0)
内科・外科混合	33(14.4)	14(14.0)	14(17.9)	5( 9.8)
特殊病棟	26(11.4)	13(13.0)	8(10.3)	5( 9.8)
その他	6( 2.6)	4( 4.0)	1( 1.3)	1( 2.0)
<b>病棟の診療科数</b>				
単科病棟	116(50.7)	53(53.0)	39(50.0)	24(47.1)
2科の混合病棟	46(20.1)	19(19.0)	17(21.8)	10(19.6)
3科以上の混合病棟	53(23.1)	21(21.0)	19(24.4)	13(25.5)
その他	14( 6.1)	4( 4.0)	1( 1.3)	1( 2.0)

(50.7%)、次いで3科以上の混合病棟53人(23.1%)であった。

3群別でみると、臨床経験年数2～3年目のA群は100人(43.7%)で、年齢で最も多かったのは21～24歳74人(74.0%)、次いで25～29歳23人(23.0%)で、平均年齢は $24.2 \pm 1.7$ 歳であった。所属病棟での経験年数は2～3年目に分布し、最も多かったのは3年目93人(93.0%)で9割以上を占めており、平均は $2.9 \pm 0.3$ 年だった。プリセプターの経験回数では1回目99人(99.0%)、2回目1人(1.0%)で、ほとんどが1回目の経験者であった。

臨床経験年数4～5年目のB群は78人(34.1%)で、年齢で最も多かったのは25～29歳53人(67.9%)、次いで21～24歳20人(25.6%)で、平均年齢は $25.7 \pm 2.7$ 歳であった。所属部署での経験年数は1～5年目に分布し、最も多かったのは4年目50人(64.1%)、次いで5年目12人(15.4%)で8割以上を占めており、平均 $3.8 \pm 1.0$ 年であった。プリセプターの経験回数では1回目45人(57.7%)、2回目30人(38.5%)、3回目3人(3.8%)で、2回以上経験者が4割であった。

臨床経験年数6年目以上のC群は51人(22.2%)で、年齢で最も多かったのは25～29歳と30～34歳が共に20人(39.2%)で、次いで35～39歳9人(17.6%)、40～44歳2人(3.9%)で、平均年齢は $31.2 \pm 4.3$ 歳であった。所属病棟での経験年数は1～7年目に分布し、最も多かったのは2年目13人(25.5%)、次いで3年目10人(19.6%)で平均 $3.5 \pm 1.8$ 年であった。プリセプターの経験回数では1～6回目までに分布し、最も多かったのは2回目22人(43.1%)、次いで1回目並びに3回目12人(23.5%)、4回目4人(7.8%)、6回目1人(2.0%)で、2回以上の経験者が約8割と最も多く、平均は $2.2 \pm 0.9$ 回であった。

看護基礎教育課程では、専門学校(3年課程)が最も多く3群とも4割以上を占めていた。最終学歴では、3群とも高等学校卒業が最も多かった。勤務している病棟では最も多かったのは、A群では外科系43人(43.0%)、B群では内科系

30人(38.5%)、C群では外科系26人(51.0%)であった。病棟の診療科数では、単科病棟が最も多く、3群とも約5割を占めていた。

## 2. 役割受容の質問項目別回答分布について

役割受容の質問項目別回答分布を表2に示した。役割受容得点の配点が高い「非常によく当てはまる」と「かなり当てはまる」、反転項目については「まったく当てはまらない」と「ほとんど当てはまらない」の回答の2つを合わせた数についてみていく。

### 1) 役割満足について

<役割満足>では高い順にみると、Q25「世間の常識にあった生き方をしていると思う」118人(51.5%)が最も高く約半数を占めていた。次いでQ23「自分らしい生き方をしている」81人(35.4%)、Q26「今の生活に生きがいを感じている」72人(31.4%)、Q13「自分の役割にあった生き方をしていると思う」62人(27.0%)、Q14「自分の今の役割に満足している方である」49人(21.4%)、Q2「今の自分に満足している方である」47人(20.5%)、Q3「自分の能力を十分に生かしていると思う」35人(15.3%)であった。最も少なかったのはQ12「それなりの成績をあげている方である」15人(6.6%)であった。

### 2) 役割評価について

<役割評価>では高い順にみると、Q16「自分の役割など、どうしてもよいことだ」と捉えていない人は115人(50.2%)で5割を占めていた。次いでQ8「つまらない生き方をしている」と捉えていない人は107人(46.7%)、Q11「自分の生き方が何か間違っている」と捉えていない人は101人(44.1%)、Q5「やりたくないことばかりをさせられている」と捉えていない人は82人(35.8%)、Q20「今の自分は本当の自分ではない」と捉えていない人は80人(34.9%)、Q7「自分が何をやるべきなのか、よく分からない」と捉えていない人は74人(32.3%)であった。最も低かったのはQ6「多く時間をムダにしている」と捉えていない人は60人(26.2%)で約3割であった。

表2. 役割受容の質問項目別回答分布

n=229 人 (%)

項目	まったく当てはまらない	ほとんど当てはまらない	あまり当てはまらない	かなり当てはまる	非常によく当てはまる
<b>役割満足</b>					
Q2 私は、今の自分に満足している方である。	11 ( 4.8)	59 (25.8)	112 (48.9)	46 (20.1)	1 ( 0.4)
Q3 私は、自分の能力を十分に生かしていると思う。	5 ( 2.2)	46 (20.1)	143 (62.4)	35 (15.3)	0 ( 0.0)
Q12 私は、それなりの成績をあげている方である。	19 ( 8.3)	69 (30.1)	126 (55.0)	13 ( 5.7)	2 ( 0.9)
Q13 私は、自分の役割にあった生き方をしていると思う。	5 ( 2.2)	42 (18.3)	120 (52.4)	58 (25.3)	4 ( 1.7)
Q14 私は、今の自分の役割に満足している方である。	11 ( 4.8)	50 (21.8)	119 (52.0)	47 (20.5)	2 ( 0.9)
Q23 私は、自分らしい生き方をしていると思う。	10 ( 4.4)	35 (15.3)	103 (45.0)	73 (31.9)	8 ( 3.5)
Q25 私は、世間の常識にあった生き方をしていると思う。	4 ( 1.7)	14 ( 6.1)	93 (40.6)	109 (47.6)	9 ( 3.9)
Q26 私は、今の生活に、生きがいを感じている。	8 ( 3.5)	40 (17.5)	109 (47.6)	64 (27.9)	8 ( 3.5)
<b>役割評価</b>					
*Q5 私は、やりたくないことばかりをさせられているような気がする。	18 ( 7.9)	64 (27.9)	102 (44.5)	41 (17.9)	4 ( 1.7)
*Q6 私は、多くの時間をムダにしているような気がする。	0 ( 0.0)	60 (26.2)	97 (42.4)	48 (21.0)	24 (10.5)
*Q7 私は、自分が何をやるべきなのか、よく分からない。	0 ( 0.0)	74 (32.3)	87 (38.0)	49 (21.4)	19 ( 8.3)
*Q8 私は、つまらない生き方をしていると思う。	28 (12.2)	79 (34.5)	81 (35.4)	37 (16.2)	4 ( 1.7)
*Q11 私は、自分の生き方が、何か間違っているような気がする。	30 (13.1)	71 (31.0)	94 (41.0)	31 (13.5)	3 ( 1.3)
*Q16 私は、自分の役割など、どうしてもよいことだと思う。	31 (13.5)	84 (36.7)	100 (43.7)	12 ( 5.2)	2 ( 0.9)
*Q20 私は、今の自分は、本当の自分ではないような気がする。	29 (12.7)	51 (22.3)	112 (48.9)	31 (13.5)	6 ( 2.6)
<b>役割有能感</b>					
*Q15 私は、自分の能力に、あまり自信が持てない方である。	2 ( 0.9)	16 ( 7.0)	73 (31.9)	100 (43.7)	38 (16.6)
*Q18 私は、自分のやるべきことを、思うようにこなせないことがある。	1 ( 0.4)	15 ( 6.6)	73 (31.9)	114 (49.8)	26 (11.4)
*Q22 私は、何をしてもよいのか分からずに、困ってしまうことがある。	4 ( 1.7)	39 (17.0)	100 (43.7)	71 (31.0)	15 ( 6.6)
*Q24 私は、ひよっとすると失敗するのではないかと、不安になることがある。	1 ( 0.4)	11 ( 4.8)	61 (26.6)	117 (51.1)	39 (17.0)
*Q27 私は、自分のしていることにあまり自信が持てない方である。	2 ( 0.9)	25 (10.9)	86 (37.6)	91 (39.7)	25 (10.9)
<b>役割達成</b>					
Q9 私は、自分に与えられたことを、積極的にこなしていける方である。	5 ( 2.2)	38 (16.6)	127 (55.5)	52 (22.7)	7 ( 3.1)
*Q10 私は、責任のあることは、なるべくやりたくない方である。	2 ( 0.9)	33 (14.4)	113 (49.3)	69 (30.1)	12 ( 5.2)
Q19 私は、家族やまわりの人から、何かを期待されていると思う。	5 ( 2.2)	27 (11.8)	106 (46.3)	80 (34.9)	11 ( 4.8)
Q21 私は、やるべきことは、きちんとやりとげる自信がある。	7 ( 3.1)	16 ( 7.0)	109 (47.6)	88 (38.4)	9 ( 3.9)
Q28 私は、自分の果たすべき役割がよく分かっている方である。	4 ( 1.7)	39 (17.0)	134 (58.5)	51 (22.3)	1 ( 0.4)
Q29 私は、もっと他のことをやってみたいと思う。	8 ( 3.5)	61 (26.6)	111 (48.5)	49 (21.4)	0 ( 0.0)
Q30 私は、たいいていのことなら、うまくやれる方である。	9 ( 3.9)	49 (21.4)	118 (51.5)	50 (21.8)	3 ( 1.3)
<b>予備尺度</b>					
Q1 私は、社会の中でそれなりの役割を果たしていると思う。	2 ( 0.9)	22 ( 9.6)	103 (45.0)	101 (44.1)	1 ( 0.4)
Q4 私は、自分に何を期待されているのか、よく分からない。	6 ( 2.6)	52 (22.7)	104 (45.4)	62 (27.1)	5 ( 2.2)
Q17 私は、もし生まれ変われるのなら、もっと別の生き方をしてみたいと思う。	9 ( 3.9)	12 ( 5.2)	47 (20.5)	92 (40.2)	69 (30.1)

\*: 反転項目

### 3) 役割有能感について

<役割有能感>では高い順にみるとQ22「何をしてもよいのか分からずに、困ってしまうことがある」と捉えていない人は43人(18.8%)が最も高く2割程度であった。次いでQ27「自分のしていることにあまり自信が持てない方である」と捉えていない人は27人(11.8%)、Q15「自分の能力に、あまり自信が持てない方である」と捉えていない人は18人(7.9%)、Q18「自分のやるべきことを、思うようにこなせない」と捉えていない人は16人(7.0%)、最も低かったのはQ24「ひよっとすると失敗するのではないかと、不安になることがある」と捉えていない人で12人(5.2%)であった。

### 4) 役割達成について

<役割達成>では高い順にみるとQ21「やるべきことは、きちんとやりとげる自信がある」97人(42.4%)で最も高く4割を占めていた。次いでQ19「家族やまわりの人から、

何かを期待されていると思う」91人(39.7%)、Q9「自分に与えられたことを、積極的にこなしていける方である」59人(25.8%)、Q30「たいいていのことなら、うまくやれる方である」53人(23.1%)、Q28「自分の果たすべき役割がよく分かっている方である」52人(22.7%)、Q29「もっと他のことをやってみたいと思う」49人(21.4%)であった。最も低かったのはQ10「責任のあることは、なるべくやりたくない方である」と捉えていない人で35人(15.3%)であった。

### 3. 役割受容の質問項目別の平均値と標準偏差

役割受容の質問項目別の平均値と標準偏差を表3に示した。

#### 1) 役割満足について

<役割満足>について対象者全体で平均値が高かった項目順にみるとQ25「世間の常識にあった生き方をしていると思う」 $3.5 \pm 0.7$ 点、Q23「自分らしい生き方をしていると思

表3. 役割受容の質問項目別の平均値と標準偏差

		n=229 mean±SD(点)			
項目	全対象者	A群 (2~3年 n=100)	B群 (4~5年 n=78)	C群 (6年以上 n=51)	
<b>役割満足</b>					
Q2 私は、今の自分に満足している方である。	2.9±0.8	2.8±0.8	2.8±0.8	2.9±0.8	
Q3 私は、自分の能力を十分に生かしていると思う。	2.9±0.7	2.9±0.7	2.9±0.6	3.0±0.6	
Q12 私は、それなりの成績をあげている方である。	2.6±0.8	2.5±0.8	2.6±0.7	2.9±0.7	
Q13 私は、自分の役割にあった生き方をしていると思う。	3.1±0.8	3.1±0.9	3.0±0.8	3.2±0.6	
Q14 私は、今の自分の役割に満足している方である。	2.9±0.8	2.9±0.8	2.9±0.8	3.0±0.8	
Q23 私は、自分らしい生き方をしていると思う。	3.2±0.9	3.1±1.0	3.1±0.9	3.3±0.7	
Q25 私は、世間の常識にあった生き方をしていると思う。	3.5±0.7	3.5±0.8	3.4±0.7	3.6±0.8	
Q26 私は、今の生活に、生きがいを感している。	3.1±0.9	3.1±0.8	3.1±0.9	3.1±0.8	
<b>役割評価</b>					
*Q5 私は、やりたくないことばかりをさせられているような気がする。	3.2±0.9	3.2±0.9	3.4±0.8	3.1±1.0	
*Q6 私は、多くの時間をムダにしているような気がする。	2.8±0.9	2.7±0.9	3.0±0.9	2.9±1.0	
*Q7 私は、自分が何をやるべきなのか、よく分からない。	2.9±0.9	2.9±0.9	3.0±0.8	3.0±1.0	
*Q8 私は、つまらない生き方をしていると思う。	3.4±1.0	3.5±1.0	3.2±1.0	3.5±0.9	
*Q11 私は、自分の生き方が、何か間違っているような気がする。	3.4±0.9	3.4±1.0	3.3±0.9	3.6±0.9	
*Q16 私は、自分の役割など、どうでもよいことだと思う。	3.6±0.8	3.6±0.9	3.5±0.8	3.6±0.8	
*Q20 私は、今の自分は、本当の自分ではないような気がする。	3.3±0.9	3.3±1.0	3.1±0.8	3.6±0.9	
<b>役割有能感</b>					
*Q15 私は、自分の能力に、あまり自信が持てない方である。	2.3±0.9	2.3±0.9	2.3±0.8	2.4±0.9	
*Q18 私は、自分のやるべきことを、思うようにこなせないことがある。	2.4±0.8	2.3±0.8	2.3±0.8	2.5±0.8	
*Q22 私は、何をしてもいのか分からず、困ってしまうことがある。	2.8±0.9	2.5±0.8	2.9±0.9	3.0±0.9	
*Q24 私は、ひよっとすると失敗するのではないかと、不安になることがある。	2.2±0.8	2.1±0.8	2.3±0.8	2.4±0.8	
*Q27 私は、自分のしていることにあまり自信が持てない方である。	2.5±0.9	2.4±0.9	2.5±0.8	2.8±0.9	
<b>役割達成</b>					
Q9 私は、自分に与えられたことを、積極的にこなしていける方である。	3.1±0.8	3.1±0.8	3.0±0.6	3.3±0.8	
*Q10 私は、責任のあることは、なるべくやりたくない方である。	2.8±0.8	2.8±0.8	2.7±0.8	2.8±0.8	
Q19 私は、家族やまわりの人から、何かを期待されていると思う。	3.3±0.8	3.4±0.9	3.2±0.7	3.2±0.8	
Q21 私は、やるべきことは、きちんとやりとげる自信がある。	3.3±0.8	3.3±0.8	3.3±0.8	3.5±0.8	
Q28 私は、自分の果たすべき役割がよく分かっている方である。	3.0±0.7	3.0±0.7	2.9±0.6	3.3±0.6	
Q29 私は、もっと他のことをやってみたいと思う。	3.9±0.8	3.9±0.8	3.9±0.7	3.8±0.8	
Q30 私は、たいいていのことなら、うまくやれる方である。	3.0±0.8	2.9±0.9	2.9±0.7	3.1±0.7	
<b>予備尺度</b>					
Q1 私は、社会の中でそれなりの役割を果たしていると思う。	3.3±0.7	3.3±0.7	3.3±0.7	3.4±0.7	
Q4 私は、自分に何を期待されているのか、よく分からない。	3.0±0.8	3.1±0.9	3.1±0.7	2.9±0.8	
Q17 私は、もし生まれ変われるのなら、もっと別の生き方をしてみたいと思う。	3.9±1.0	3.9±1.0	3.8±1.1	4.0±1.1	

\*: 反転項目であり、反転して得点化した

う」3.2 ± 0.9点、Q26「今の生活に生きがいを感している」3.1 ± 0.9点、Q13「自分の役割に合った生き方をしていると思う」3.1 ± 0.8点、Q2「今の自分に満足している方である」とQ14「今の自分の役割に満足している方である」2.9 ± 0.8点、Q3「自分の能力を十分に生かしていると思う」2.9 ± 0.7点、Q12「それなりの成績をあげている方である」2.6 ± 0.8点であった。

3群別にみると、平均値が最も高かった項目は3群ともにQ25「世間の常識に合った生き方をしていると思う」で、A群は3.5 ± 0.8点、B群は3.4 ± 0.7点、C群は3.6 ± 0.8点であった。最も低かった項目は3群ともにQ12「それなりの成績をあげている方である」で、A群は2.5 ± 0.8点、B群は2.6 ± 0.7点、C群は2.9 ± 0.7点であった。

## 2) 役割評価について

<役割評価>について対象者全体で平均値が高かった項目順にみるとQ16「自分の役割

など、どうでもよいことだと思う」3.6 ± 0.8点、Q8「つまらない生き方をしていると思う」3.4 ± 1.0点、Q11「自分の生き方が、何か間違っているような気がする」3.4 ± 0.9点、Q20「今の自分は本当の自分ではないような気がする」3.3 ± 0.9点、Q5「やりたくないことばかりをさせられているような気がする」3.2 ± 0.9点、Q7「自分が何をやるべきなのか、よく分からない」2.9 ± 0.9点、Q6「多くの時間をムダに過ごしているような気がする」2.8 ± 0.9点であった。

3群別にみると平均値が最も高かった項目では、A群とB群はQ16「自分の役割などどうでもよいことだと思う」で、A群は3.6 ± 0.9点、B群は3.5 ± 0.8点であったが、C群はQ11「自分の生き方が、何か間違っているような気がする」でC群は3.6 ± 0.9点と、Q20「今の自分は本当の自分ではないような気がする」でC群は3.6 ± 0.9点で、A群とB群は同じであったが、C群は異なっていた。最も低

かった項目では、A群とC群はQ6「多くの時間をムダにしているような気がする」で、A群2.7±0.9点、C群2.9±1.0点であったが、B群はQ7「自分が何をやるべきなのか、よく分からない」でB群は3.0±0.8点、A群とC群は同じであったが、B群は異なっていた。

3) 役割有能感について

<役割有能感>について対象者全体で平均値が高かった項目順にみるとQ22「何をして良いのか分からずに困ってしまうことがある」2.8±0.9点、Q27「自分のしていることにあまり自信が持てない方である」2.5±0.9点、Q18「自分のやるべきことを思うようにこなせていないことがある」2.4±0.8点、Q15「自分の能力にあまり自信が持てない方である」2.3±0.9点、Q24「ひよっとすると失敗するのではないかと不安になることがある」2.2±0.8点であった。

3群別にみると平均値が最も高かった項目は、3群ともにQ22「何をして良いのか分からずに困ってしまうことがある」で、A群は2.5±0.8点、B群は2.9±0.9点、C群は3.0±0.9点で3群とも同じだった。最も低かった項目は、3群ともにQ24「ひよっとすると失敗するのではないかと不安になることがある」で、A群は2.1±0.8点、B群は2.3±0.8点、C群は2.4±0.8点だったが、B群はQ24に加えてQ15「自分の能力に、あまり自信が持てない方である」でB群は2.3±0.9点と、Q18「自分のやるべきことを思うようにこなせないこ

とがある」でB群は2.3±0.8点、A群とC群は同じであったが、B群は異なっていた。

4) 役割達成について

<役割達成>について対象者全体で平均値が高かった項目順にみるとQ29「もっとほかのことをやってみたいと思う」3.9±0.8点、Q19「家族やまわりの人から何かを期待されていると思う」とQ21「やるべきことはきちんとやりとげる自信がある」3.3±0.8点、Q9「自分に与えられたことを積極的にこなしていける方である」3.1±0.8点、Q30「たいいていのことなら、うまくやれる方である」3.0±0.8点、Q28「自分の果たすべき役割がよく分かっている方である」3.0±0.7点、Q10「責任のあることは、なるべくやりたくない方である」2.8±0.8点であった。

3群別にみると平均値が最も高かった項目は、3群ともにQ29「もっと他のことをやってみたいと思う」で、A群は3.9±0.8点、B群は3.9±0.7点、C群は3.8±0.8点であった。最も低かった項目は3群ともにQ10「責任のあることは、なるべくやりたくない方である」で、A群は2.8±0.8点、B群は2.7±0.8点、C群は2.8±0.8点であった。

4. 経験年数別の役割受容(役割満足・役割評価・役割有能感・役割達成) 得点の3群間比較

経験年数別の役割受容得点の3群間比較を表4に示した。役割受容得点の3群間比較を平均値と標準偏差で見ると、<役割満足>では対象者全体の平均は24.1±4.3点、3群比較では平

表4. 経験年数別の役割受容(役割満足・役割評価・役割有能感・役割達成・予備尺度)得点の3群間比較

		n=229 mean±SD(点)					
役割受容		全対象者	A群 (2~3年 n=100)	B群 (4~5年 n=78)	C群 (6年以上 n=51)	F値	p値
因子	役割満足	24.1±4.3	23.8±4.5	23.7±4.1	25.0±3.8	1.80	0.168
	役割評価	22.7±3.9	22.6±4.2	22.4±3.6	23.3±3.7	0.84	0.434
	役割有能感	12.2±3.1	11.6±3.3	12.3±2.8	13.0±3.0	3.60	0.029*
	役割達成	22.3±2.9	22.3±2.9	21.8±2.7	22.9±3.0	2.17	0.116
	予備尺度	10.2±1.5	10.3±1.5	10.2±1.4	10.3±1.6	0.24	0.791

一元配置分散分析, 多重比較 \*;p<0.05



均点が最も高かったのはC群 $25.0 \pm 3.8$ 点で、次いでA群 $23.8 \pm 4.5$ 点、B群 $23.7 \pm 4.1$ 点の順で、C群が最も高かったが3群間に有意差はみられなかった。

〈役割評価〉では対象者全体の平均は $22.7 \pm 3.9$ 点で、3群比較では平均点が最も高かったのはC群 $23.3 \pm 3.7$ 点で、次いでA群 $22.6 \pm 4.2$ 点、B群 $22.4 \pm 3.6$ 点の順であったが、3群間に有意差はみられなかった。

〈役割有能感〉では対象者全体の平均は $12.2 \pm 3.1$ 点で、3群比較では平均点が最も高かったのはC群 $13.0 \pm 3.0$ 点で、次いでB群 $12.3 \pm 2.8$ 点、A群 $11.6 \pm 3.3$ 点であった。A群は、C群に比べ有意 ( $P < 0.05$   $F=3.60$ ) に得点が低かった。

〈役割達成〉では対象者全体の平均は $22.3 \pm 2.9$ 点で、3群比較では平均点が最も高かったのはC群 $22.9 \pm 3.0$ 点で、次いでA群 $22.3 \pm 2.9$ 点、B群 $21.8 \pm 2.7$ 点の順であったが、3群間に有意差はみられなかった。

## V. 考察

今回、プリセプターの役割受容を臨床経験年数別に比較し、プリセプター看護師の臨床経験年数による差異から示唆を得ることを目的に検討した。

### 1. プリセプター看護師の役割受容

役割受容の因子別にみても本調査対象者の役割受容の結果は、〈役割満足〉 $24.1 \pm 4.3$ 点、〈役割評価〉 $22.7 \pm 3.9$ 点、〈役割有能感〉 $12.2 \pm 3.1$ 点、〈役割達成〉 $22.3 \pm 2.9$ 点であった。これは、職業を持つ20代女性を調査した結果<sup>20)</sup>の〈役割満足〉 $25.7 \pm 5.7$ 点、〈役割評価〉 $23.3 \pm 5.3$ 点、〈役割有能感〉 $13.8 \pm 3.3$ 点、〈役割達成〉 $25.2 \pm 3.7$ 点であったという報告の点数よりも、全ての因子が低かった。また、看護師を対象とした結果<sup>21)</sup>の〈役割満足〉 $25.0 \pm 4.5$ 点、〈役割評価〉 $25.8 \pm 4.6$ 点、〈役割有能感〉 $14.2 \pm 3.8$ 点、〈役割達成〉 $22.8 \pm 3.5$ 点の結果と比べても低かった。濱口によれば<sup>22)</sup>、

プリセプターの役割を担うことには負担感があると述べている。このことから、プリセプター看護師には、看護師として患者により良い看護を提供するという責任に加えて、新卒看護師が一人前の看護師になるように主にかかわる責任があることで役割受容が低かったのではないかと推察された。

## 2. 役割受容の4因子別の臨床経験年数比較

### 1) 役割満足

〈役割満足〉は、自分の生き方や役割に対する生きがいや満足を示している。得点を見ると臨床経験年数6年目以上のC群が最も高く、4～5年目のB群が最も低くなる結果であったが、3群間に有意な差はみられなかった。このことから、臨床経験年数を重ねることがプリセプターとしての役割の満足につながるということが明らかとなった。先行研究<sup>23)</sup>によれば、経験年数が長い看護師は自発性・積極性、向上力・自己開発性があり、自分の役割を意識し自己研鑽しており、職場でも自己能力が発揮され満足につながるという報告がある。このことから、本研究において臨床経験年数6年目以上のC群の得点が高かったことから同様のことがいえると考えられる。しかし、本研究の対象者の得点を見ると、臨床経験年数4～5年目のB群よりも、2～3年目のA群が高かったということは、自分の役割を意識し、自己研鑽するという姿勢が弱くなっていることが推察された。したがって、プリセプター看護師の役割満足を継続するためには、臨床経験年数4～5年目の役割満足を支援することが必要であることが示唆された。

### 2) 役割評価

〈役割評価〉は、自分の生き方や役割の肯定的評価を示している。得点を見ると臨床経験年数6年目以上のC群が最も高く、4～5年目のB群が最も低くなるという結果であったが、3群間に有意な差はみられなかった。このことから、臨床経験年数を重ねることがプリセプターとしての役割の評価につながるということが明らかとなった。自己に対する尊

重や価値の評定について先行研究<sup>25)</sup>によれば経験年数とともに高くなるとの報告がある。このことから、本研究においても臨床経験年数6年目以上のC群の得点が高かったことから同様のことがいえると考えられる。しかし、本研究の対象者の得点を見ると、臨床経験年数4～5年目のB群が最も低かったということは、自己に対する尊重や価値を低く評定していることが推察された。したがって、プリセプター看護師の役割評価を高くするためには、臨床経験年数4～5年目の役割評価を支援することが必要であることが示唆された。

### 3) 役割有能感

＜役割有能感＞は、自分の果たすべき役割を遂行する能力への自信を表している。本研究の役割有能感得点では、臨床経験年数2～3年目のA群が、6年目以上のC群と比べて有意に低いことが明らかとなった。臨床経験年数3年目の看護師について先行研究<sup>26)</sup>によれば、仕事に対する意欲は先輩からの受ける支援に影響されると報告がある。また、吉田<sup>27)</sup>は経験により時間をかけて看護職アイデンティティを育て、経験と仕事とのかかわりを通して看護師としての自分も発達すると述べている。このことから、本研究において臨床経験年数2～3年目のA群が有意に低かったのは、臨床経験年数3年目の看護師は、自分の看護を主体的に展開する時期といわれているが、その看護の展開に当たっては3年目になっても先輩の支援を必要としており自信をもてないことが推察された。そして、臨床経験年数6年目以上のC群の得点が高かったのは、長い臨床経験を通して培った看護技術や、後輩に伝えられるものをもっていることが、自分に対する自信につながっているのではないかと考える。

### 4) 役割達成

＜役割達成＞は、さまざまな役割を積極的にこなす意欲や自信を示している。得点を見ると臨床経験年数6年目以上のC群が最も高く、4～5年目のB群が最も低くなる結果であったが、3群間に有意な差はみられなかつ

た。このことから、臨床経験年数を重ねていることがプリセプターとしての役割の達成につながらないことが明らかとなった。先行研究<sup>28)</sup>によれば、臨床経験年数を得ることで自信・プライドが構築され、自ら学ぶ意欲と成長・発展しながら主体的に取り組んでいけるようになるとの報告がある。このことから、本研究において臨床経験年数6年目以上のC群の得点が高かったことから同様のことがいえると考えられる。しかし、本研究の対象者の得点を見ると、臨床経験年数4～5年目のB群よりも、2～3年目のA群が高かったということは、自ら学ぶ意欲と成長・発展しながら主体的に取り組む姿勢が弱くなっていることが推察された。したがって、プリセプター看護師の役割達成を高くするためには、臨床経験年数4～5年目の役割達成を支援することが必要であることが示唆された。

以上のことから、＜役割満足＞＜役割評価＞＜役割達成＞の得点では、臨床経験年数4～5年目のプリセプター看護師が最も低く、＜役割有能感＞では、臨床経験年数が2～3年目のプリセプター看護師と、6年目以上のプリセプター看護師に有意差が認められた。プリセプター看護師は、臨床経験年数によってプリセプターという役割の受容に違いがあることが示唆された。

今後の課題としては、プリセプター看護師の臨床経験年数により＜役割有能感＞に違いがあることを踏まえたプリセプターシップの検討が必要ではないかと考える。

## VI. 結論

- 1) プリセプター看護師は、職業をもつ20代女性および看護師を対象とした先行研究と比べて、役割受容の各因子得点が低いことが明らかとなった。
- 2) ＜役割満足＞＜役割評価＞＜役割達成＞では、臨床経験年数6年目以上のC群の得点が最も高く、4～5年目のB群の得点が最も低かったが、3群間に有意な差がなかったことから、臨床経験年数を重ねることがプリセ

ターとしての役割の満足や評価、達成感につながらないことが明らかとなった。

- 3) <役割有能感>では、臨床経験年数2～3年目のプリセプター看護師は、6年目以上のプリセプター看護師と比較して有意( $P < 0.05$   $F=3.60$ )に低いことが明らかとなった。このことから、臨床経験年数2～3年目のプリセプター看護師は、プリセプターの役割に十分な自信をもてないことが推察された。
- 4) プリセプター看護師の臨床経験年数により<役割有能感>に違いがあることを踏まえたプリセプターシップの検討が必要であることが示唆された。

## VII. 謝辞

本調査にご理解いただき、ご協力くださいましたプリセプターの皆さまを始め、ご配慮くださいました各施設の看護部長さまに心より感謝申し上げます。

(本研究は、平成19年度獨協医科大学看護学部共同研究助成を受けて行った研究の一部である)

## 引用文献

- 1) 國井治子：「卒後臨床研修」必要化に向けた検討，看護，54 (5)，p36-39，2002.
- 2) 吉井良子：プリセプターシップとは何か，看護展望，17 (5)，p529-533，1992.
- 3) 遠藤史子・橋本幸世他：臨床経験5年目看護師の成長過程について－成長を動機付けるターニングポイント－，日本看護学会論文集（看護管理），37，p326-328，2006.
- 4) 勝原裕美子：看護師のためのキャリア論－看護師の再選択②新たな役割への挑戦，看護実践の科学，31 (11)，p58-62，2006.
- 5) Robert Oliver：Teaching and Assessing Nurses, Bailliere Tindall Ltd. 1994.
- 6) Louise Bain: Preceptorship: a review of the literature, Journal of Advanced Nursing, 24, p104-107, 1996.
- 7) 川口加代子：兵庫県立こども病院におけるプリセプター制度の取り組み，小児看護，25 (10)，p1317-1322，2002.
- 8) 濱口悠子・原沢優子：プリセプターの役割理解と負担感の関連，日本看護学会論文集（看護管理），37，p243-245，2006.
- 9) G.W.オルポート，今田恵監訳：人格心理学（上），誠信書房，1970.
- 10) 岡本祐子：女性の生涯発達とアイデンティティー個としての発達・かかわりの中での成熟，北大路書房，1999.
- 11) 久保真人：バーンアウト-概念と症状、因果関係について-，心理学評論，34，p412-431，1991.
- 12) 木内妙子・関根早苗：我が国におけるプリセプター制度の普及動向と今後の課題－1986年から1996年の報告研究論文を対象に－，東京都立医療技術短期大学紀要，10，p205-212，1997.
- 13) 日本看護協会調査・研究管理部調査研究課：2001年病院看護職員実態調査，日本看護協会，2003.
- 14) 矢島ちあき：新卒看護師の支援を行っているプリセプターの経験に関する研究，神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究収録，34，p180-187，2009.
- 15) 西田志穂：小児専門病院以外の小児看護の臨床におけるプリセプターの関わり－プリセプターの知識やケア習得に焦点を当てて－，日本赤十字看護大学紀要，21，p24-32，2007.
- 16) 神開知子・小路真由他：プリセプターの困難と望む支援，日本看護学会論文集（看護管理），37，p81-83，2006.
- 17) 武田美和：プリセプターを経験した看護師の態度構造，日本看護学会論文集（看護管理），37，p79-81，2006.
- 18) 井部俊子：ベナー看護論－達人ナースの卓越性とパワー－，医学書院，p18-19，2002.
- 19) 三川俊樹：ライフ・キャリアの視点から見た役割受容，進路指導研究，11，p10-17，1990.
- 20) 前掲19)

- 21) 榊原美代子・馬場叔子：女性看護師の自己効力感を高める要因と役割受容との関係，日本看護学会論文集（看護管理），39，p217-219，2008.
- 22) 濱口悠子・原沢優子：プリセプターの役割理解と負担感の関連，日本看護学会論文集（看護管理），37，p243-245，2006.
- 23) 佐藤亜月子：中堅看護婦の役割認識に影響を与える要因，神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録，25，p240-247，2000.
- 24) 勝原裕美子：看護師のためのキャリア論－看護師の再選択②新たな役割への挑戦－，看護実践の科学，31（11），p58-62，2006.
- 25) 福田春枝・荒川千秋他：看護婦・士の自尊感情についての調査－経験年数，年齢，仕事満足度，就業意向との関連－，群馬大学保健学科紀要，22，p11-16，2001.
- 26) 倉田静香・岩崎仁美他：3年目看護師の役割認知・人的支援・仕事意欲に関する調査，東京医科大学病院看護研究集録，28，p63-65，2008.
- 27) 吉田なよ子：病院勤務の女性看護職の年齢、経験年数、職業アイデンティティ、看護専門職的自律性、バーンアウトの関連，日本赤十字看護学会誌，7（1），p68-77，2007.
- 28) 神里みどり・孫麗梅他：臨床看護職における自己教育力とその関連要因－看護職の特性とソーシャル・サポートとの関連－，Quality Nursing，8（6），p541-548，2002.